別記様式第2号（第4条関係）　　No.＿＿＿

論文内容の要旨

専攻名 （課程名）	多文化社会学専攻 （博士前期課程）	氏名	張婧錡（ZHANG JINGQI）
題名	「異文化間映画」が呼び覚ますナショナルなもの ――『二十四時間の情事』に対する観客レビューの日英仏比較を手がかりに		

本研究の目的は、映画というメディアが異なる文化的背景を持つ観客にどのように受容されるのか、特に映画が観客の歴史的・文化的歴史的背景によっていかに多様な解釈を生み出すのかを、アラン・レネ監督の『二十四時間の情事』（1959年）を手がかりに解明することである。近年では、グローバリゼーションや情報通信技術の発展により、映画の制作と配給における国際化が進んでいる。それに伴って、「異文化間映画」が持つ文化的ハイブリッド性や受容における多様性に大いに関心が集まっている。しかし、従来の映画研究は制作者の意図やテクスト分析が中心で、観客の具体的な受容プロセスやその差異を文化的多様性の観点から体系的に扱った研究は十分ではない。

そこで本研究は、『二十四時間の情事』を事例に、日本国内と海外の観客がこの映画をどのように解釈するのか、彼らの解釈にどのような歴史的・文化的な背景要因があるのかを実証的に明らかにすることを試みた。本作を分析対象に選定したのは、フランス人監督による広島原爆を題材とした作品であり、制作者と題材が文化的に異なる背景を有するがゆえに、受容の際の文化的差異を前景化しやすいと予想したからである。

研究方法としては、テキストマイニングを用いた。具体的には、オンラインの映画レビューを収集し、ワードクラウドと共起ネットワークを用いて、日本・英語圏・フランス語圏の観客レビューの特徴を定量的に比較した。さらに、ホールのエンコーディングとデコーディング理論を応用し、各観客群が映画テクストを支配的立場・折衝的立場・対抗的立場のいずれで解読しているかを分析した。

分析の結果としては、日本の観客は映画の支配的コードをそのまま受容するのではなく、戦争体験や広島原爆というトラウマ的記憶を背景に映画を再解釈する「対抗的立場」を示すのに対して、英語圏およびフランス語圏の観客は相対的により「支配的立場」または「折衝的立場」に近い解釈を行っていることを明らかにした。この結果は、映画受容に際して観客側が背景に持つ文化的・社会的背景が大きく作用していることを裏付けるものであ

り、映画研究におけるホール理論の有効性を実証したものでもある。

本研究の意義としては、従来の監督中心的な映画研究から観客中心的な研究へと視野を拡張した点に加え、計量的テキストマイニング手法を映画研究に応用し、新たな方法論的可能性を示した点が挙げられる。さらに、「異文化間映画」には、文化交流を促進するだけでなく、日本の観客が母国の歴史や文化的記憶を再認識するのを促す役割を持つことも明らかにした。併せて、この再認識によってナショナルなものが動的に形成されていくプロセスも提示した。以上の論証を通じて、「異文化間映画」の観客受容研究が異文化理解や文化的アイデンティティ形成プロセスを考察するのに重要な手がかりとなることを明らかにした。

しかしながら、本研究の限界として、分析対象がオンラインプラットフォームに限定され、観客の世代・性別分布の偏りを十分にコントロールできなかったという点が挙げられる。加えて、分析対象は『二十四時間の情事』一作品に限定したため、研究結果の普遍性については今後さらなる検証が必要である。

今後の展望としては、本研究で提案した分析手法を他の「異文化間映画」にも適用し、手法の汎用性を検証するとともに、さらに深層的な感情分析や時系列分析を導入することで、映画受容の動態的変化をより精緻に解明することが考えられる。

※作成に当たっては，文字は10.5ポイントでA4用紙2枚以内とする。